



## 防災対応トイレ設置一汐入公園

### 子供や子供連れに配慮した設計

かねてからの要望のあった「汐入公園の防災対応トイレ」の設置について、この度崎山都議から連絡をいただきました。7月に業者が決定し、9月ごろから工事が始まり、12月頃完成予定です。設置場所は大型遊具・時計塔の近くになります。その概要を説明すると建物の大きさは約60㎡。設備としては誰でもトイレ 大便器【洋】1・幼児用大便器・【洋】オストメイト1・ベビーシート1・ベビーチェア1・男子トイレ 大便器【洋】1・小便器2・幼児用大便器【洋】・幼児用小便器・ベビーシート1・ベビーチェア1・女子トイレ 大便器【洋】【和】・幼児用小便器・ベビーシート1・ベビーチェア2となっています。



## 住民の声に崎山都議要請・実現

今回の事については、自民党都議会議員である崎山知尚さんが要望書を持って東京都の公園課を訪ね、この事を説明するなど、窓口となって協力していただきました。今回のトイレ設置により汐入公園内でのトイレは屋外で5カ所となり日常においても利用者にとりましては使いやすくなります。災害時においても大きな役割を果たすものと期待されています。



# 「浅草病院」新築・移転・工事中！

## 平成28年5月開設 地上8階建て

南千住周辺の方にもおなじみの哺育会「浅草病院」現在の東浅草で昭和55年から30年間に渡り運営してきましたが、この度、右図の地図に示す、桜橋近くの今戸に新築・移転することになりました。【台東区今戸2丁目】現在、工事が始まった所で病床数は136床・診療科目は内科【呼吸器・循環器・消化器・神経・内分泌代謝】・整形外科・外科【一般・消化器・内視鏡】・泌尿器科・皮膚科・耳鼻咽喉科・眼科・婦人科・ペインクリニック内科・リハビリテーション科・麻酔科・健診・人間ドック・二次救急指定と紹介されています。診療科目の増設。在宅医療の充実。救急室の拡張等機能強化を図っています。



敷地面積は2,300㎡、延べ床面積は11,000㎡となっています。

## セメントサイロ跡地協議会最終会開催 3事業社プレゼンテーション実施

7月11日にセメントサイロ跡地協議会が開催されました。この日は20事業者を超える応募総数の中から最終的に3社に絞り込み、それぞれの会社の代表者によるプレゼンテーションが行われました。今後の行程としては、JRと荒川区が協議し、8月頃を目標に事業者の決定の見込みです。



# 汐入公園 噴水時間延長要望

## 8月は午後5時まで決定

連日の暑さと夏休みが重なり、汐入公園噴水の周りには毎日、大勢の家族連れで賑っています。この噴水には地域の方々ばかりではなく、最近では遠くから車で来る方もいるとか。現在、噴水の利用時間は10時から16時となっています。私としては以前から7・8月の2か月位はもう少し時間を延長しても良いのではないかと考え公



園事務所に要望を致してきました。具体的には公園事務所職員の勤務時間の範囲以内で機械操作に支障を起さない程度の延長ということで、8月は9時から17時の1時間の延長となりました。

宮内庁献上「桃」が今年もやって来ます！

都内最大級の町会行事「汐入祭り」開催

日時 8月3日(日) AM 11 ~ 14時頃

会場 汐入公園多目的広場(抽選で桃が当たる)

納涼盆踊りは 8月9 ~ 10日(土・日)



コスモス・ひまわりが満開 汐入ボランティア花壇

コスモス【秋桜】は字のごとく、秋に咲くものと考えていました。ところが汐入公園や対岸の木母寺【白髭東公園内】のボランティア花壇の中には今、満開のヒマワリや朝顔に交じってコスモスの花も満開となっています。



# 明治時代を牽引した南千住地域 東京で3番目に稼働した「火力発電所」

南千住は隅田川を利用した舟運に頼って発展してきましたが、明治29年になってこの舟運を考慮して設置された隅田川貨物駅の完成はこの地域の姿を大きく変える事になって行きます。昭和7年には、隅田川駅の取扱量は年間120トンを超えるまでになり、東京の駅では汐留駅をおさえて堂々のトップに君臨していたという記録があります。江戸以降、街道と舟運に恵まれていた南千住は、その物流の拠点としての力は明治の財界人も注目するようになっていました。最初に着目したのは、本誌にも掲載した「大倉喜八郎」と「原六郎」でした。大倉は帝国ホテル・ホテルオークラ、サッポロビールや大成建設、日清製油などの設立や東京経済大学の設立にも関わる5傑に入る明治財界人です。原は東武鉄道・総武線・信越本線など鉄道事業の発展に尽くしていきます。大倉と原は日本の電気の父・藤岡市助がとなえた電気事業に興味を示し、3人で日本初の電力会社である「東京電燈」を設立し、明治20年から東京市内で日本初の電力供給を始めることになりました。電気事業は好調なスタートを切り、すぐに浅草に発電所を増設しますが間に合わず、そこで経営陣がさらに大きな発電所を計画しますが、そこに白羽の矢を立てた土地が南千住でした。明治39年「千住発電所」として、南千住駅の裏・現在の南千住第二中学校付近に建設し電力供給が始まりました。しかし、当時は火力発電よりも水力発電が主流になってきていたので、東京電燈も当初の9,000キロワットから半分の4,500キロワットに変更し、水力発電に移行したため東京市内の電力需要に応えることが出来なくなり、大正6年に廃止に追い込まれます。今回は掲載できませんでしたが、南千住は国家の根幹をなす千住製絨所や三河島下水処理場の建設など日本の近代化の重責を担ってきた地域です。

